

てやる
朝のお勤め
日本比較文学会会報
122号
5.63年
12月1日

朝のお勤め

稲賀繁美

スト学はもはや特権的な眺望パースペクティ
ヴを自らにも許さない。

ける政治問題とは切り離し得
る政治的考察の考察で
あるにせよ、国、時代を問わ
るもの中心主題こそこの政
争象である筈だ。そのような
字の領域を越え、政治論争に
は、それは果たして誤りであ
り有害であるとみなされるので
か実は作家の意図ではないの
大会に持ち込まれる政治は

あまり日本からの参加者の姿のみられなか
った朝の総会講演の批評を試みれば、少しは
他の方々の報告と異なった文章も草せようか
と、三日間律義に出席してみた際に取ったノ
ートを読み直してはみたけれど、でてくるの
は次のような愚にもつかない感想のみであ
る。

理論に、普遍的な学問の共通地盤を築める
ことが不可能であることを、理論研究自らが

イコット、差別に帰結しがち
他国の教唆によることもあ
る。間接的であって「意図し
ない」という場合もある。ど
ち
れるべきかの判断は容易では
ない。
ンテル・パーティーでは政治・
にまで発展しかねないので慎
しかし、世界中から参集す
る多くは比較文学の会議がカ
ンダと思っははまい。彼ら
が悪いなどと考えるどころ
に平和だけでなく、イデオロ
も包含する政治および政治的
の根底をなすものと信じてい
にはその彼らがかやってくる。

明らかさまに抑じらる。科学性の保証そのものが、学問の歴史性のなかに回顧的ないしは自己保存の運動として築かれた正統性と相互依存の産物でしかないことを、当の学説史研究が自己破壊的な様相をも帯びつつ暴露してゆく。また翻訳行為の現場での具体的実践における解釈の解放性と規範性とのあいだの永遠の葛藤にそれ自身戦略的に埋没する出口なしの営みである他ないはずの、理論的翻訳学が、その提唱する歴史的文献学の「対象の徹底的コーパス作り」という、理論的にも自己撞着した基礎作業のなかに疎外されて、かえって本来の理論的倒錯を自らに禁ずる本末転倒に至る。そうした自縄自縛の順列組み合わせのはてしなき結合と分解の悪夢として、テク

の三講演のこのような感想を差し挟んだのは、理論的考察以前に止どまった素人談議の域をでないが、すくなくとも、理論的考察それ自体が解釈学的循環に内属して諸テクニクとの相互決定のうちに文学空間を形成してゆき、織物の褶曲にあたらたな歴史的变化力を加え、あるいは断層をきざみこみ、対象と意味との相補的生産に働き掛け、その中に消費される媒介変数であることは確認される。残るは、こうして意味論的に自己崩壊を吐けた「理論」が「作品」と相互象眼された今、両者の間の非決定性を取り扱う学の科学性の根拠自体の非決定性をまえにして、なおかつ学を論ずる無知を問いつす術に賭けるか否かである。

循